

# 東北公益文科大学

## 総合研究論集

# 17

ワッパ騒動研究史

三 原 容 子



東北公益文科大学

Tohoku University of Community Service and Science

## ワッパ騒動研究史

三原 容子

### 1. はじめに

2009年9月11日、鶴岡市水沢で「ワッパ騒動義民之碑」除幕式が挙行された。快晴の空の下、祝詞奏上、除幕、玉串奉奠、琵琶歌献奏が行われ、翌日の新聞各紙に写真入りで報じられた。

本稿の目的は、百数十年の時を経てようやく碑が建立されたのを機に、数多いワッパ騒動関連書を整理整頓することにある。祝賀会の場で「ワッパ騒動研究の足跡を語る」と題して短い話をした時に、詳しくは本誌第16号に執筆すると約束したので、その責任も果たさなくてはならない。

今までにワッパ騒動関連書を80点ほど確認した。軽く読んでみたい人や本格的な研究を志す人の便宜を図るため、存在を確認した全文を一覧できるようにし、かつ、全体の見取り図を提示したいと考えた。ただし、本稿で取り上げる文献以外は、筆者のホームページに掲げるので、そちらでご覧いただきたい<sup>1</sup>。

筆者は2001年に庄内地域に移住してきた新参者で、ワッパ騒動についても初学者である。文献整理などとはまことに僭越な仕業であるが、多くの人々に知っていただきたいので、また、本稿の発表を機に新史料が発見される可能性が高まるメリットを考えて、敢えて発表することにした。全文のリストには、地域の諸先輩からご教示をいただいた文献を含んでいる。現在の研究状況や今後の研究の方向性については、鶴岡の「庄内歴史懇談会」のメンバーのご高見を参考にした。

庄内地域史には、他の地方とは異なる事情があることについては、すでに別稿で論じた<sup>2</sup>。庄内地域では近世から近現代まで支配層が入れ替わることなく継続したため、史料の扱いや歴史の見方について、他地域以上に特別の配慮が

必要となる。1844年の大山騒動、1867年の丁卯の大獄（大山庄太夫一件）など、文書が徹底的に廃棄され、関係者に厳しい箝口令が敷かれたような事件は、真相が明らかにされず、地元の人々に知られることがないままに時が過ぎた。真相を明らかにするには非常な努力が必要だった<sup>3</sup>。

ワッパ騒動も支配層が直接的に関わった事件であるから、事情が似ている。実際に真相が隠されたまま長い時が過ぎてしまった。しかし時代が明治維新以後であり、中央官庁への訴願運動や裁判闘争などが展開されたことが史料状況の差を生んだ。研究者の努力で村々の資料が発掘できたことも幸いであった。史料を発掘し読み解き全貌を明らかにする作業が可能だったことが、今日までのワッパ騒動研究の成果の前提となっている。

## 2. 騒動の経過

ワッパ騒動の名称は、闘いに勝利した暁にワッパ（曲げ木の弁当箱）にいったいの金が返ってくるというところからつけられたとされる。1894年の文献から見え、以後「ワッパ騒動」「ワッパ事件」「ワッパ一揆」などと使われてきた。本節では、理解に必要と思われる程度に背景と経過を説明しておきたい。

明治初期の庄内地域の行政区分は以下に見るように、1868年9月から1871年11月までの3年余り、最上川の北と南が行政区域を異にしていたが、第二次酒田県成立により庄内全体が一つの県となった。

1868（明元）年9月、庄内藩（17万石）は戊辰戦争に負けて城を明け渡し、やがて酒田には国の直轄支配のための民政局が設置された。12月、庄内藩に一回目の転封命令が出るが、嘆願運動があり、翌年中止となる。

1869年6月、二回目の転封命令が出たが、領民から集めた献金による転封中止工作が成功する。7月、酒田を中心とする政府直轄地が第1次酒田県となり（柴橋・尾花沢を含む）、9月、庄内藩（12万石）が大泉藩と改称された。

1871年7月、廃藩置県により大泉藩が大泉県となるが、県令が中央政府から派遣されることもなく、旧藩士の支配が続いた。西郷隆盛の配慮によるものとされている。11月、第二次酒田県が成立し、旧大泉県と旧松嶺県に県酒田出張所管轄地を合わせて23.5万石となる。県令は不在で、藩政時代に引き続き

大参事松平親懷（旧家老）や権大参事菅実秀（旧中老）が実権を持った。ワッパ騒動はこの第二次酒田県の時代に起こった。

1874年12月、三島通庸が酒田県令に任命された。

1875年9月、県庁を酒田から鶴岡に移し鶴岡県となった。

1876年8月、鶴岡県は山形県（第二次）、置賜県と統合し、山形県（第三次）となった。初代県令は鶴岡県令の三島通庸である。

騒動の主要原因は、①中央政府が金納（石代納）を認めた後も県は金納を認めず、米価高騰時代に巨額の差額を得ていたこと（逆に農民は余分に税を納めさせられていた）、②旧藩時代の高率の雑税と村入用が、廃止されることなく取り立てられ、その用途について疑念が持たれたことである。裁判の過程で、③士族の生活のための松ヶ岡開墾に公費が使われ、強制的な徴用がなされたことも大きく取り上げられるようになった。他にいくつかの問題も取り上げられている。

旧藩時代的な支配体制を維持しようとする勢力の政策に対して、多くの農民と一部士族と商人が、時には大規模なデモンストレーションや実行使によって、時には中央政府への訴願運動によって、異を唱えた構図と見ることができよう。そこに中央政府内の元老院と内務省の対立や、西郷隆盛の動向なども複雑にからんでいた。

さらに、時間系列に従って7期に分けて見ていく。なお、4と5は庄内と東京で同時並行的に進行した。

## 1. 前史

石代納問題以前に、すでに第二次酒田県当局に対する異議申し立ては始まっていた。

1872年、県は士族による開墾事業を始めた。公金を私的開墾に投入したこと、農民から労力や物品を挑発したこと以外にも、次のような問題があった。庄内藩には幕末に組織された浪士隊である新徴組・新整組が預けられていたが、藩への帰属意識の低い彼らも開墾作業を強制され、逃亡する者には追っ手が差し向けられたのである。

こうしたやり方に批判的な士族が、県当局が中央政府とは異なる政策を続けていることについて、1873年に司法省へ訴状を提出した。ワッパ騒動指導者

の一人金井質直らもその中にいた。訴えを受けた司法省の判事が酒田県に派遣され取調が行われ、翌年に県官の一部に処分を申し渡されたが、内容は手ぬるく、県の方針が変わることはなかった。

## 2. 石代納闘争の始まり（1873年末～1874年）

新政府では1872年に石代納（金納）を全面的に認めた。しかし酒田県は県下に知らせず、従前通り米で納めさせていた。米価が高騰していたため、金納の方が現物納よりも税はずっと安く済む。1873年末に県外で許可されていると聞いた片貝村の鈴木弥右衛門が石代納を願い出たが、県は認めず、家屋敷を取り壊す始末であった。石代納を願った各地の農民は逮捕されてしまった。

県を相手にしても正論が通らないことを知った本多允釐（士族、金井質直の弟）や農民たちは、県境を越え上京して内務省に嘆願する道を選んだ。直訴は却下されるが、内務省が事情を県に問いあわせ、県からの報告書ではよくわからないと、調査に出向くことになった。

## 3. 内務小丞松平正直の裁定とその影響（1874年7月～9月）

酒田県に派遣された内務小丞松平正直は、7月、投獄されていた農民等を出獄させた上で説諭を加え、裁定を下した。石代納の全面許可については農民の要求通りであったが、二年間の過納分は返還なしという点など、納得のいくものではなかった。雑税については曖昧な部分が多かった。

裁定の中に、村関係の雑税は肝煎や戸長に直接掛け合って受け取れという言葉があった。これ以降、農民は過納分の返還を求めるとともに、肝煎や戸長に要求して組費・村費の出納の実態を明らかにする闘いを開始する。闘いの中で、農民の利益に沿って米を換金する「石代会社」の構想が発表され、雑税と村入費の闘争はいっそう盛り上がり、各地で集会が開かれる。辞職願を提出する戸長も出てきた。

## 4. 指導者の逮捕と釈放運動（1874年9月～）

闘争が盛り上がり、各地の戸長・肝煎が困り果てる中、県は9月11日から指導者逮捕と農民集団弾圧の強硬策に出た。出動したのは松ヶ岡開墾の士族たち

である。

多数の逮捕者で酒田の牢獄はあふれ、農民たちは釈放運動を展開し、酒田まで押しかけようとした。参加した農民の数は1万数千名。同時に、逮捕を免れた人々によって、上京嘆願運動が展開された。

## 5. 森藤右衛門による訴願闘争（1874年10月～1876年）

上京した金井質直らも捕まる中、早い時期から中央政府へ訴える活動を重要視していた酒田商人の森藤右衛門は、東京と酒田を行き来しつつ建白運動に尽力する。1874年12月には三島通庸が酒田県令として着任するが、森は三島に対して建言に努めた。

調査のために酒田に出張した内務省の林茂平は、森の訴えに関心を示してくれたが、調査結果の報告書は却下となり、林は急病で亡くなった。

三島県政は郡村改革などの新政策を断行したが、基本的に松平・菅の現体制と政策方針を同じくし、騒動鎮圧が主眼であった。森は三島県政批判を含めた訴願運動を続けた。

1875年の秋、元老院の沼間守一書記官が鶴岡に派遣され取り調べを行う。三島にとっては迷惑な話であったが、ワッパ騒動の原因が旧態依然たる酒田県政にあることを沼間が明らかにした。

## 6. 児島惟謙判事、鶴岡出張臨時裁判（1876年）と2年後の判決言い渡し

沼間の取調結果により、司法省が児島惟謙を鶴岡に派遣して臨時の法廷を開廷することになった。一カ月余りの審問ののち、児島判事は、県官十数名の処分判決以外は帰京後に裁決すると申し渡して鶴岡を去った。判決案はまもなく書き上げられたが、西郷隆盛の動きをにらんでしばらく棚上げとなり、1878年に言い渡された。県官の非を認める農民側一部勝訴であり、一部敗訴でもあった。現物納による過納金は返ってこなかったが、村費等については合計6万円余りの金が返ってくることになった。

## 7. 判決の後

還付金に対して三島県令は強制的寄付を求めた。また、村費分については控

訴審があって、判決が確定するのは1880年である。その後に訴訟経費を要求する裁判も続く。森は庄内で自由民権運動を続け、金井らの士族は判決言い渡し前に離脱していた。

### 3. 関連文献の区分

以下では、(1) 諸史料公刊以前の文献、(2) 史料にもとづく研究、(3) ワッパ騒動を題材とした小説・児童文学の3つに分けて、文献刊行状況の見取り図を描きたい。研究の進展によって(1)から(2)へと発展した。(3)は(1)と(2)の周辺的存在であるが、読むのが容易であるため、別立てとした。

#### (1) 諸史料公刊以前の文献

##### A. 愚民史観の文献

松平・菅に対して私的な怨恨を持つ金井質直や本多允釐ら不平士族が、農民たちを煽動して騒動を起こしたものだ、農民たちは彼らの言葉にそそのかされたのだという見解が、騒動当時の県当局の文書に出てくる。農民を度々「愚民」や「小民共」と表現している。旧庄内藩家臣団（御家禄派）が旧藩時代の君臣関係を保持し、一致団結して政治や経済、教育分野で勢力を保持してきた庄内地域では、こうした見方が第二次大戦後に至るまで根強く残ってきた。当時の支配層が広めてきたのであろう。こうした見方を聞かされた農民の子孫が、先祖のしたことを恥ずべきことと考えたのも当然である。佐藤誠朗は調査の際に、黒川能の大夫から「[剣持]寅蔵は大泥棒と聞いていたが、義民なんだな」と言われたという（佐藤誠朗、p.310）。

「ワッパ（原文は「ハツパ」）」の語の初出文献である渋谷光敏『庄内沿革誌』（1894年）にも「無頼の徒を郷村に派し無知の民を煽動し大に騒擾し」（p.14）などの言葉が出てくる。濱村正三郎「羽州庄内のワッパ一揆」（1930年）は史料を読み込んだ論文であるが「進歩的思想を有する一部の不平武士が、保守的にして新政府の制令を忠実に行はざるものに反抗したるに乗じて、生活困難なる無智の農民が付和雷同した為に勃発」（p.33）とまとめている。

千葉弥一郎『廃藩置県前後之荘内秘話』（1932年）、大泉漁史「荘内ワッパ一件と三百代言の沼間守一」（1938年）、岩本成雄『荘内経済年表』（1938年）、国分剛二編「荘内ワッパ事件の資料」（1940年）なども同様である。大林清『庄内士族』（1941年）は実名小説であり、人物描写がある分だけいっそう、「愚民史観」が印象的な作品である。

この史観は、ワッパ騒動指導者である金井質直兄弟や森藤右衛門については、非常に悪い印象を示している。問題が多い人物であるという見方はその後に長く影響する。

## B. 義民史観

県の不正に対して困難な闘いを挑んだと見る見方で、最も早い時期の文献は、黒田伝四郎「明治初年庄内ワッパ騒動」（1939年）である。幕府の三方領地替え命令後の転封反対運動を農民の義挙とする「天保義民」史観を批判する『庄内転封一揆の解剖』の付録として刊行された。2004年に高島真による「平易文訳」が出たので、今日では、70年前に書かれた内容を誰でも読めるようになっている。

服部之総は「自由民権と封建貢租—ワッパ事件概説—」を1948年に季刊雑誌『思索』に発表した（1950年に「ワッパ事件」と題して『著作集第五巻 明治の革命』に収める）。明らかに農民側に立った内容である。

上林與市郎の『庄内農民とワッパ騒動——天保・明治の転封一揆とワッパ騒動の真相』（1957年）は3つの事件を扱った95頁の小冊子である。「三大農民騒擾事件の真相と背景を究明し、その中で庄内農民の祖先が、本間家と酒井藩にいかにか苦しめられ、そしてそれに対していかに戦ったかを明らかにしたもの」と「序」に書いているように、論旨は明快である。ワッパ騒動の概要をこの小冊子で知ったという庄内地域住民も多い。

武力に勝る士族らの不正に対抗して立ち上がった農民と見る場合、「義」は農民側に認められる。今回の「義民之碑」建立につながっている。

## （2）史料にもとづく研究

歴史は、いつ、誰が、どこで、何をしたかの細部によって組み立てられている。



真相を明らかにするためには、史料にもとづくことが最も重要である。史料収集は戦前から断片的に行われてきたが、戦後、東京の公的機関での収集、農村部での収集が進められ、また史料の活字化がなされて、読みたい者が読める条件がかなり整った。

史料集として重要なものを挙げると、『山形県史 資料編2 三島文書』（「ワッパ事件関係書類」、1962年）、『山形県史 資料編19 近現代史料1』（「ワッパ騒動」1978年）、『酒田市史 史料編8 社会編』（「ワッパ騒動史料（北溟文庫）」、1981年）、鶴岡市による『ワッパ騒動史料 上巻（荘内史料集17）』（1981年）、同じく『ワッパ騒動史料 下巻（荘内史料集18）』（1983年）である。

原文を読みやすくするために句読点を付してもらっても、史料は明治初期の候文だから、容易に意味を解せるわけではない。それでも、日付や差出人と宛先がはっきりした文書類が、書物という扱いやすい形で提供されたことの意味は計り知れないものがある。

史料収集に尽力した関係者の一人である佐藤誠朗は、『ワッパ騒動と自由民権』（1981年）を著した。史料を読み解いて騒動の細部を明らかにした、ワッパ騒動研究の金字塔ともいえるべき文献である。

また、『荘内日報』の1986年2月2日から1991年6月22日まで72回にわたって連載された田原音和「ワッパ騒動」と農民」も、佐藤誠朗らの研究を読み込み、史料を咀嚼しながら、上述の騒動7段階のうちの5までを平易な表現で丁寧になぞっている。

### （3）ワッパ騒動を題材とした小説・児童文学

「史実に沿ったもの」と「騒動関係者が登場する創作物」に分けて見ていきたい。登場人物の所作や台詞が書かれていること自体、小説はフィクションを含んでいる。それでも、ほぼ史実に沿って描こうとしたか、それとも、自由に筆を走らせたかで、史実と作品との距離には大きな差がある。

図書館の検索で「ワッパ」を入れると、史実とかけ離れた「ワッパ」をタイトルに持つ小説がヒットする。その内容を史実に近いものと誤解しないでほしいという老婆心で、この項目を設けた。

## A. 史実に沿ったもの

「愚民史観」による大林清『庄内士族』は、この分類に入れることができよう。

ワッパ騒動の農民の姿を物語化したのが佐藤治助『ワッパ一揆——東北農民の維新史』（1975年）である。主人公と周辺人物を定めることによって、非常に読みやすくなっている。佐藤治助の原作を戯曲化した劇が、何度か上演されてきたことも付記しておこう。

米軍の演習と人々の生活を描いた『山が泣いてる』の共同著者の一人である鈴木実は、児童向けに『オイノコは夜明けにはえる』（1972年）を書いている。ワッパ騒動を題材に取材をした上で書かれた本である。

## B. 騒動関係者が登場する創作物

二冊取り上げる。一冊目は最上三郎『小説 ワッパ騒動顛末記』（1977年）である。森藤右衛門が主人公であり、他にも多数の関係人物が登場するが、新徴組の殺された侍の妻と森との性的な場面が出てくると、刊行の意図がよくわからない。性的にもタフな森藤右衛門像を描こうとしたのだろうか。

二冊目は田中哲『ワッパ騒動 鬼県令に立ち向った人々』（2000年）である。第一部は小説で、第二部は戯曲である。著者自身が「生活や性格などは勿論フィクションである」と書いているが、登場人物が実際にはありえない会話を交わす情景が続くのは、理解に苦しむ。史実も混じっているだけに、混乱を与える内容となっている。

## 4. 今後の研究への期待

研究者でありたいと願う筆者は、歴史上の特定人物や集団を褒めたり貶したりすることには極力慎重でありたいと考えている。それは今回の顕彰碑建立関係者の多くも同様だろう。ではなぜ「顕彰」したのか、「義民」と呼んだのか。

権力者の不正を知った時、自分自身だけのことを考えるならば、何とかその場をやり過ごす算段する道もあるだろう。利害関係が小さければ、目をつむっておく道もある。相手は生殺与奪の権を持っているのだから、刃向かうのは恐ろしい。しかしワッパ騒動関係者は、不正を不正として糺す道を選んだ。その

ことは、たとえ我が身のためだったとしても確実であって、大いに世に知らせるべきであり、犯罪者扱いを続けていてはならない。「顕彰」活動を行ってきたことに間違いはなかったと考える。

一方で、目に見える形で碑が立った今日、筆者の不勉強のせいかもしれないが、輪郭のはっきりした石碑のように、すっきりと解明しておきたいことがある。思い付くまま羅列しよう。

幕末の大山騒動や明治以後の天狗騒動が記憶に新しい時期にワッパ騒動は起こった。どのような関連があったのだろうか。

裁判に勝ったと言ってよいのか。東京の新聞は勝利を報じたが、地元の反応がつかめない。当時の日記等が発見されれば事情がわかるかもしれない。

愚民史観に立った文献には、森、金井、本多、沼間、児島らについて、批判的な記述がある。その中には真実が含まれている可能性がある。史料を集めて検討する作業が一層必要とされている。

最近日塔哲之によって進められているような、農民の騒動後の地域における活動ももっと知りたいところである。

川北（飽海郡）の人々はどのように情報を受けていたのだろうか。影響はどの程度あったのだろうか。同時代の飽海・酒田の状況を知りたい。（2009年9月30日脱稿）

（付記：その後、新史料が数点発見された。2009年12月）

---

<sup>1</sup> 「ようこそ三原研究室@ネットへ」 <http://fm.koeki-u.ac.jp/~mihara/>

<sup>2</sup> 「公益考（二）——庄内地域史の特殊性について」『東北公益文科大学総合論集』第12号（2007）

<sup>3</sup> 大山騒動や丁卯の大獄については、阿部正巳『幕末庄内藩騒動記』を元にして書かれた黒田伝四郎『やまがた幕末史話』（1977年）や、石井親俊『維新前後における庄内藩秘史』（1967年）、佐藤幸夫『庄内御料百姓一揆 大山騒動史——余目郷名主の記録より——』（1992年）程度しか文献がない。米沢藩士雲井龍雄の関連文書が残っており、偶然残された地域外史料が事件を語るというのも興味深い（高島真『雲井龍雄庄内藩探索紀行』2005年）。

## 参考文献（発行年代順）

- 渋谷光敏『庄内沿革誌』榮得堂、1894年
- 浜村正三郎「羽州庄内のワッパ一揆」『経済史研究』14号、1930年
- 千葉弥一郎『廃藩置県前後之庄内秘話（庄内叢書 第三輯）』庄内史料研究会、1932年
- 大泉漁史「庄内ワッパ一件と三百代言の沼間守一」『庄内』第3号、1938年
- 岩本成雄『庄内経済年表』、高橋三代吉発行、1938年
- 黒田伝四郎「明治初年庄内ワッパ騒動」(『庄内転封一揆の解剖』1939年の付録)
- 国分剛二編「庄内ワッパ事件の資料」『庄内』30・31号、1940年
- 大林清『庄内士族』輝文堂書房、1944年
- 服部之総『明治の革命（服部之総著作集第五卷）』理論社、「ワッパ事件」、1950年
- 上林與市郎『庄内農民とワッパ騒動』新生社、1957年
- 斎藤寿夫『庄内農民運動史』中村書店、1962年
- 石井親俊『維新前後における庄内藩秘史』壺誠社、1967年
- 鈴木実『オイノコは夜明けにほえる』童心社、1972年
- 佐藤治助『ワッパ一揆―東北農民の維新史』三省堂、1975年
- 最上三郎『小説 ワッパ騒動顛末記』自費出版、1977年
- 山形県『山形県史 資料編19 近現代史料 1』1978年
- 佐藤誠朗『ワッパ騒動と自由民権』校倉書房、1981年
- 酒田市『酒田市史 史料編8 社会編』1981年
- 鶴岡市『ワッパ騒動史料 上巻（庄内史料集17）』1981年
- 鶴岡市『ワッパ騒動史料 下巻（庄内史料集18）』1983年
- 田原音和「「ワッパ騒動」と農民」(1)～(72)『庄内日報』1986年2月2日～1991年6月22日
- 田中哲『ワッパ騒動 鬼県令に立向かった人々』共同出版、2000年
- 佐藤治助『自由民権の先駆者森藤右衛門』鶴岡書店、2002年
- 黒田伝四郎編・高島真平易文訳『平易文訳庄内転封一揆の解剖』鶴岡書店、2004年